天から落ちてきた男　　オランダ

昔むかし、あるところに、お百姓とおかみさんが住んでいました。

ある日のこと、おかみさんは、市場に出かけての帰り道、道の真ん中で、じっと空を見上げている若者に出会いました。おかみさんは、近づいていって、

「あんた、どうして空を見上げてるんだい」と聞きました。若者は、

「ぼくは、たった今空から落ちて来たところなんです。ところが、その穴が、もう見えなくなってしまってね」といいました。おかみさんは、

「そうかい。空から落ちて来たんなら、あんた、天国の様子には、くわしいんだろうね」と聞きました。

「あたりまえだよ」

「そうかい。それじゃ、きっとうちの息子のことも知ってるだろうね。去年死んじゃったんだよ。ケースっていうんだよ」

「ケースですか。あいつ、あんたの息子なんですか。ぼくのとなりに住んでますよ」

「そりゃあ、よかった。あの子、どうしてるね」

「とても元気ですよ。ただ、先週、靴下がだめになったっていってたなあ。ソーセージとハムとバターもなくなったって」

「まあ、なんてことでしょう。靴下を用意してくれる人はいないのかい」

「いませんよ。天国じゃ、自分でやらなくてはいけないんです」

「ソーセージやハムやバターは買えないのかい」

「買えますよ。でも、恐ろしく高いんです」

「まあ、なんてことでしょう」

それからしばらく、若者はおかみさんに天国のようすを話していましたが、

「もう帰らないと。遅刻してしまう」といいました。すると、おかみさんはいいました。

「ひとつ頼まれてくれないかい。天国に帰る前にひとっとびうちに来て、荷物を預かってほしいんだよ。それをケースに持って行ってくれないかい」

若者は、おかみさんの家について行きました。おかみさんは、着る物や食べ物を入れたつつみをふたつ作りました。ひとつはケースのために、もうひとつは、この親切な若者のために。それから、ケースのためにさいふも渡しました。

若者は、別れを告げて帰って行きました。おかみさんは、若者がすっかり見えなくなるまで見送りました。そして、思いました。

「おとなりさんがここへ来たことを知ったら、ケースはどんなに喜ぶかしら」

おかみさんは、ケースがあのつつみを受けとったかどうか、ついに知らせてもらえませんでした。わたしが聞いたところでは、それは、あの若者が、自分の落ちてきた穴をまだ見つけられないでいるからだということです。

おしまい

村上郁再話

資料『世界の民話２６オランダ・ベルギー』小澤俊夫訳／ぎょうせい